

CONTENTS

02 特集 ものが「材料」に変わるとき

02 廃材という第二の人生【加治聖哉】

06 子どもが見つける材料の世界【河村泰正】

08 ズビたんのきになる、みになる!

・「小さな抽象的—建築的油彩(黄色と青色の球形のある)」
アーティゾン美術館【島本英明】

10 ICT活用のタネ 特別編

- ・みてコレを活用する
- ・ICT活用アイデア【長篠真利子】

11 日常を見つめて

- ・【小学校】あの子が選ぶカーテンの色は?【大倉匡仁】
- ・【中学校】見方が変わる【南雲優人】

12 題材アレンジレシビ

- ・【小学校】光の国 ゆめの色【杉下大輔】
- ・【中学校】未来に向かって成長する私【四ノ宮研一】

16 先生のため

- ・「金属でできた風と自然」【上廻哲也】



特集

ものが「材料」に 変わるとき

廃材という第二の人生



かじ せい や
加治 聖哉

廃材再生師。建築現場や木製品の工場から木の廃材を譲り受け、動物の彫刻として蘇らせる。新潟県長岡市栃尾を拠点に活動中。

廃材一つ一つに、その歴史が詰まっている。建築現場や工場から出た廃材を集め、そこから浮かび上がる動物達を作品として生み出す加治聖哉さん。単なる再利用ではなく、廃材がたどってきたストーリーを読み取り、新たな命を与えるアーティストだ。取材に訪れた編集部を出迎えたのは、さまざまな廃材と、今にも動き出しそうな動物彫刻の数々。狼の迫力ある姿、愛らしいペンギンのフォルム——そのすべてが廃材から生まれたものだ。



身近な廃材がつないだ 制作への道のり

——まず、加治さんのご活動について教えてください。

私は廃材再生師として、建築現場や木製品の工場から譲り受けた木の廃材で、実物大の動物をつくっています。廃材は、この活動を通して関わらせていただいた方から提供を受けることがほとんどです。地域でさまざまな活動をする中で知り合いが増えていき、たくさんの廃材をいただけるようになりました。

——作品の要である廃材は、作品制作に合わせて入手されているのですか。

廃材は事前に写真を送っていたとき、状態を確認した上で、使用予定の有無に関わらず引き取らせていただいています。「これはあの動物の一部に見えるな。」「色味が似ているな。」という発想をもとにつくり始めることもあれば、つくりたいものが先に決まっていて、それに合う材料をストックの中から探すこともあります。

——廃材を材料として使用するようになったきっかけについてお聞きたいです。

廃材で制作を始めたのは大学時代です。私は、美術系の大学で金属工芸を専攻していたのですが、その傍ら廃材を使った動物の作品づくりを始めました。きっかけは、同じ大学の建築学科で行われていた椅子制作の授業です。学生の技量だと材料からパーツを切り出す際に多くの端材が出るんですよ。それらが活用されることなくコンテナに山盛りに捨てられているのを見て、「もったいないな。」と感じ、材料として使い始めました。

——大学での気づきが今の制作活動につながっているのですね。
つくることは幼い頃から好きで、祖父が大工だったので木という材料も身近なものでした。大学で学んでいた金属工芸も楽しかったのですが、やはり木材が自分の中で一番しっくりくる材料なんです。

——現在のご活動は、大学卒業と同時に始められたのですか。

大学卒業後、アーティストのスタジオで1年間働きました。その後、新潟県長岡市栃尾の地域おこし協力隊に声をかけてもらったことを機に、拠点を移しました。そこで地域を盛り上げつつ、いただいた廃材で自由に制作を続けて、今に至ります。

廃材がたどってきた ストーリーを感じて

—制作をされる上で、廃材だからこそ感じる難しさはありますか。

実は、廃材ならではの難しさはほとんど感じていません。むしろ私は、不規則にいろいろな形があるほうがつくりやすいタイプです。元からある形を生かすことが楽しい。積み木で遊んでいるような感覚に近いですね。

—加治さんはどのような点に廃材の魅力を感じていますか。

廃材の魅力は、やはり背景やストーリーです。一般的な材料はホームセンターなどで購入するものですが、廃材はすでに誰かが使った後のもの。だからこそ、歴史や物語の背景が詰まっていて、材料として面白いと感じます。例えば、伝統工芸が盛んな地域で、100年前の木製部品をいただいたとき、その当時何がつくられ、どんな人達がどんな時代を過ごしていたのか、お話を聞くことができました。このような出会いがあるのも廃材ならではのと思っています。

—ものの歴史を知ること、廃材の魅力がより深まりますね。ほかに印象的なエピソードがあれば教えてください。

楽器の廃材をいただいたときのことが印象に残っています。40年間琴を使ってこられた方が、諸事情でその琴を手放

さなければならなくなったそうです。ただ捨てるのは名残惜しいということで、「作品にしてほしい。」とご依頼をいただきました。そこで、その方が飼われていた猫をつくることにしました。琴の木の色がちょうどその猫の毛色に似ていたんですよ。おかげで、完成した作品もその猫そっくりにつくることができました。

あとは、伝統工芸の職人さんから聞いた話も忘れられません。江戸時代は、今のよう大量生産・大量消費ではなく、物を直しながら最後まで使い切るのが当たり前だったそうです。今でこそSDGsと言われますが、それはもともと日本に存在した考え方なんだと、そのとき改めて教わった気がしました。

「らしさ」を感じる動物

—作品を生み出す上で、どのようなことを大切にしていますか。

第一に、廃材を廃材らしく残すこと。

材料の特性や色を生かして、パツと見てどんな廃材なのかがある程度わかるようにつくっています。例えば作品の色は上から塗り直したりせずに、材料そのものの色を生かしています。

第二に、ひと目で何の動物かわかること。サイズは実物大が基本です。そして、動物の肉つきや筋肉の感じをリアルに表現するために、骨格を根拠にしています。骨格の画像を印刷して比率を計算し、実物大に置き換えます。骨格さえとらえて



琴の廃材から生み出された猫の作品。
ひげにも琴の弦が使われている。



いれば、肉つきは写真を見ながら再現できるので、シルエットだけでも何の動物かわかるように意識しています。ポーズは、映画や動物園で見て「かっこいいな。」「美しいな。」と感じた瞬間や、その動物らしいイメージから選びます。狼なら獲物に飛びかかる寸前、牛なら突進してき

うな一瞬。誰もがパツと思いつかべる「らしさ」を切り取るんです。

あと、私は猫アレルギーなのですが、猫が大好きなんです。本物は飼えないけれど、作品なら自分の手で抱きかかえることもできる。実際の動物では難しいことを、実物大の彫刻にすることで楽しめ

るといつことも大事にしています。

第三に、目を入れないこと。

目が特徴的な動物は多いですが、私自身、剥製などの動物の視線に恐怖心を抱いてしまつてことがあります。だから、作品にはあえて目を入れないようにしています。

日常での視点と制作のつながり

——生活の中での見方が、制作につながっていることはありますか。また、廃材を使った制作を続ける中で、日常の視点に変化はありましたか。

犬や猫が散歩しているのを見て「あんなふうに歩くんだな。」と観察したり、無機物を見ても「こういう仕組みで動くのか。」と考えたりしています。見立て



ることも多いですね。何かのフォルムが動物に似ていると、「次の作品にこのイメージを反映させてみようかな。」と思うこともあります。

日常の視点については、「もったいない」という気持ちが根っこにあるんだと思います。私の祖母はティッシュペーパーの空き箱を小物入れにしたり、チラシを折つて小さな箱にしたりするの

が得意でした。捨てるに使うという発想を、祖母から多く学びました。だから、今の活動も廃材を使って日常的に何かをしているという特別な意識はなく、自然体でやっています。

——図工や美術の時間でも不要になつたものを材料として扱うことがあります。子ども達や先生方にメッセージをいただけますか。

まず、子ども達へ。

何かを思いついたら、すぐにつくってみてほしいです。すぐに行動できないときは、メモを取つて後でつくればよい。思いついたことを実際にやってみると、新しい発見があったり、理解が深まつたりします。考えすぎずに、直感でつくつたほうが楽しいですよ。

そして、ご指導される先生方へ。
子ども達が「何の目的で、何をつくり



たいのか。」それをまず聞いてみてほしいです。実用的なものをつくりたいのか、ただ形を追求したいのかで、子どもの感覚は変わってきます。それがわかれば、例えば技術的な面で「この道具が使いやすいよ。」といったように、発想を大切にしたいアドバイスができるのかなと思います。そういったサポートが子ども達の発想をより広げるのではないかと思います。

私が主催している子ども向けのワークショップでも、最初の説明の後は、子どもから聞かれたとき以外は見守るようにしています。手が止まつている子がいたら「何をつくりたいの。」と目的を聞き、それでも悩んでいたら材料を渡して二度触つてみたら。」と声をかけます。実際に触つてみることで、ただの廃材がその子にとつての「材料」へ変わるんですよね。

「何者でもない」ものだからこそ

——最後に、廃材が材料に変わったと加治さんご自身が感じる瞬間はありますか。

私は廃材を受け取つた時点で、そのものの本来の役割はもう終わっているんだと考えています。廃材からすれば、次は何になるかわからないというゼロからのスタートです。だから、私の中で「何かが変わる」という認識はあまりなくて、「まだ何者でもない」ものに見えています。そこにいろいろな特徴を見出したとき、初めてびつたりの役割が見つかるというふうに考えています。



加治さんの制作に対する姿は、子ども達が空き箱やペットボトルに向かう姿とどこか重なる。子ども達もまた、元の用途をとらえるのではなく、ここにあるもので何ができるかというゼロからの視点で材料を見つめている。

「役割が変わるというのは、結果だと思ふんです。だから、変わるまでは、何も、誰にもわからない。」

この加治さんの言葉は、ものをどう見つめ、どう向き合うかという問いを投げかけている。もう使えないと思つていたものの中に、新たな可能性を見出すこと。ものに向ける視点を少し変えるだけで、多様な可能性が広がり、そこに新たな価値が生まれるのだ。



子どもが 見つける 材料の世界

—ものが秘める可能性—

図工の時間には、大人が日常の中で不要だと思っていたものが、子どもの手によって魅力的な存在へと変わる瞬間があります。子どもがそれを手に取ったときから、ただの「もの」は、その子にとって特別な意味をもつ「材料」へと変わり始めます。そこから新しい形やイメージが生まれ、その子なりの世界が広がっていきます。つまり、子どもの見方そのものが変化するのです。

廃材再生師の加治聖哉さんは、廃材について「役割を終えた時点で次に何になるかわからないゼロからのスタートになる。」と語っています。もともと何かの目的に使われていたものは、その役割を終えることで、一度意味を失いますが、それは同時に「何にもなりうる可能性を秘める」という

ことでもあります。図工の時間における材料も、子どもの見方次第でさまざまな意味をもつ材料へと生まれ変わるのです。

子どもが材料に 意味を見出す瞬間

子どもは、材料に触れるとき、形の面白さや手触り、重さ、音、匂いといった、材料そのものの特徴に反応します。例えば、材料を手にした子どもから「何この形、面白い。」といった声が聞こえてくる場合があります。このような言葉は、子どもがその材料を自分なりにとらえ始めたことを表しているといえるでしょう。材料は、最初から使い方が決められているわけではありません。

特集

ものが「材料」に
変わるとき

子どもが触ったり、形を変えたり、組み合わせたりする過程で、その子なりの価値が生まれていくものです。まだ何者でもない材料に向き合うこと。それこそが、子どもが自分らしさを発揮していく出発点になるのだと考えます。

「不要なものだからこそ生まれる」余白

不要になったものには、「こう使うもの」という決まりがなくなります。そのため、そこにはさまざまな見方や発想を広げる余白が生まれます。この余白こそが、子どもの見方や発想を引き出す大きなポイントになります。

使い方の制約がない材料と向き合うとき、子ども達の中には「こうしてみたい。」「こんなふうにも見えるかもしれない。」「こんな自由な発想が生まれます。加治さんが廃材から新たなイメージを見出していくように、子ども達も材料に関わりながら何度もつくりかえ、試行錯誤する中で、自分なりの見方や意味を紡ぎ出していきます。

不要なものを材料として扱う魅力は、もともとの用途から自由になれることです。例えば、子ども達は工作の授業で箱を箱としてではなく、乗り物や別の世界の空間に見立てます。子ども達は見立てによって、一つのことを多面的にとらえ、さらに発想を広げていくのです。

「関わりの中で変わる見方と意味」

材料との関わりは、人との関わりの中でさらに深まっていきます。友達からの「それいいね。」「こつちから見るともって面白いよ。」といった言葉によって、自分では気づかなかった新たな見方に出会うこともあります。

こうした過程を通して、子どもは見方が一つではないことに気づきます。形は始めから決まっているものではなく、自分のイメージだけで完結するものでもありません。他者との関わりの中で、子ども達の見方は多様に変化します。このとき材料は、単なる「もの」としてではなく、新しいイメージを生み出すきっかけとして機能するのです。

「教師の役割」

材料と向き合う活動において、教師の役割は非常に重要です。教

師は単に、材料の使い方や完成形を示すだけの存在ではありません。子どもがどのように材料と関わり、何に気づいているのかに目を向け、その意味を共に探求する存在です。子どもが見つけた小さな発見や疑問に耳を傾けることで、教師は子どもと同じ視点に立つことができます。そのとき、両者の間には同じものを見つめながら理解し合おうとす



る関係が生まれます。このような関係の中でこそ、子どもは安心して自分の思いを表していくことができるのです。

「図工における材料の魅力」

図工において材料とは、あらかじめ用途が決められたものではなく、関わりの中で新しい意味が生まれ続ける存在です。不要になったものが材料へと変わるとき、そこでは単にものが再利用されているだけではなく、子どもの見方が変わり、考え方が広がっているのです。

子どもは材料にそれぞれの意味を見出し、その意味を変化させながら活動していきます。その過程の中で、教師や友達と関わりながら、自分の感じ方や考え方をさらに深めていく。その積み重ねが、その子らしさを育んでいくのです。

まだ何者でもないものが材料へと生まれ変わるとき、そこには子どもの材料と深く向き合う力が働いています。教師がその力に寄り添いながら共に歩んでいくことで、子ども達は豊かな表現を育んでいくのではないでしょうか。

東京都練馬区立
豊玉第二小学校
主任教諭
かわむら やすまさ
河村 泰正





さらに深く知ることができる
「ズビたんのもっときになる!」は ▶
こちらから!



造形ジャーナルの
キャラクター、ズビたん。
絵を描くことやモノづくりが大好きで、
最近、美術作品を見ることに夢中!
ズビたんと一緒に
学芸員の方にお話を聞いて、
作品の深い魅力を
発見していきましょう。

今回は
アーティゾン美術館の
学芸員
島本英明さん
にお話を聞きます!



ちい せうしゆあうてい けん ぶくでい けい さい き いちろ あかいろ せうしゆあうてい
小さな抽象的一建築的油彩 (黄色と青色の球形のある) [厚紙/油彩/24.1×34.3cm] 1915 年
パウル・クレー [1879 ~ 1940] 石橋財団アーティゾン美術館蔵 [東京都]



キュビズムとは

パブロ・ピカソやジョルジュ・ブラックによって創始された芸術運動。描く対象を多方面・他視点から観察し、それらを幾何学的に分割、再構成して表す手法が特徴。

作品を
紹介してくれた
美術館

アーティゾン美術館

〒104-0031

東京都中央区京橋1-7-2

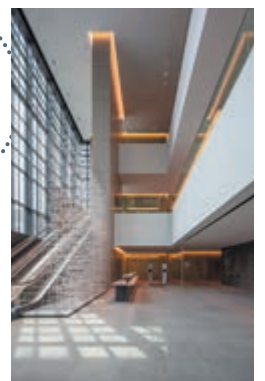
TEL: 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

開館時間: 10:00~18:00 (入館は17:30まで)

※祝日を除く金曜日は20:00まで開館

(入館は19:30まで)

休館日: 月曜日(ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌平日休館)、展示替え期間、年末年始など



幾何学的な形に興味を
ひかれる作品ですね！



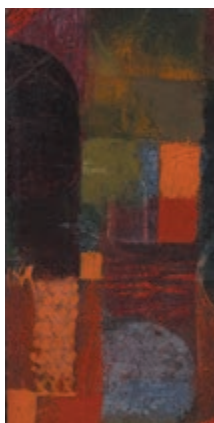
島本 この作品が生まれた時代、絵画表現の一つの動きとして、対象を三角形や長方形などのさまざまな形に分割して再構成する描き方がみられました。クレーもその影響下にあったことから、この作品に幾何学的な形の構成を取り入れたのだと考えられます。

作品全体として、
クレーがイメージした
対象はありますか。



島本 この作品は、1914年に旅したチュニジアのカイルアンという都市の風景が刺激となり、制作されたと考えられています。チュニジアは北アフリカの地中海沿岸に位置する国で、クレーが住んでいたドイツとは異なる文化圏です。カイルアンで見た構造的でリズムカールに反復されるような建築群からイメージを昇華させたのではないのでしょうか。

また、建築で用いられる色彩や太陽光の印象もドイツと異なります。そのため、



モスクのアーチ形を思わせる表現からもイスラム文化の風景を感じさせる。

この作品は色彩の面でもカイルアンからの影響を受けていると考えられます。

異国の地カイルアンの風景から着想を得たんですね。

色彩に注目すると、黄色の球形が鮮やかに描かれていることに目が向きます。これには何か意図があるのですか。



島本 タイトルに示されていることから、黄色の球形を含めた二つの球形は作品の核であると考えられます。実際のところ、この時期にクレーがどのような考えで作品を描いていたのか、それを知るための手がかりは多くはありません。

ですが、1920年代に書かれた手稿などにあるクレーの考えをもとにするならば、クレーは色彩の関係性を考えて描いていたのではないかと推測できます。球形の黄色と青色は色相環において対角的な関係です。さらに、全体を占める赤褐色を含めると三者的な関係性が見えてきます。

クレーの初期の作品を見ると、線描画を多く描いています。クレーはなぜ抽象的な表現を描くようになったのですか。



島本 クレーが抽象的な表現に意識を向けるきっかけとなった二つの動きがあります。一つは、1912年にワシリー・カンディンスキーやフランツ・マルクが

が中心となって結成した青騎士^{あおきし}とよばれる芸術家グループの動きです。青騎士は前衛的な芸術家の集まりで、クレーもこれに参加しました。

もう一つは、ロベール・ドローネーという芸術家との出会いです。青騎士はミュンヘンでの動きですが、パリではキュビズムという動きがありました。キュビズムにバリの芸術家たちが追随する中、ドローネーは色彩が抑制されていたキュビズムに鮮やかな色彩の要素を取り入れました。ドローネーの作品を青騎士の展覧会で見たクレーは感銘を受け、色彩への意識を強めたと考えられます。

抽象的に表現する上で、
クレーにはどのような
思いがあったのか
お聞きしたいです。



島本 クレーは、形や色彩といった要素が画面上で相乗効果を生むことを大事にしていました。簡単な言葉で表すならば、各要素が生きているように見えるということですね。他の要素との関係を通して、形や色彩を作品の中で生き生きとしたものとして存在させる。自然と同じように、生命的なエネルギーがあるものを自ら生み出すということが、クレーの芸術に対する根本的な思いであると考えています。

この作品のおすすめの鑑賞方法がありますか。



今回の作品は
美術1
61ページに
掲載！



最後になりますが、
島本さんにとっての
クレーの魅力を
教えてください。



島本 線や色からなる形のしくみに関心をもっていた人物であるということとその作用が魅力的ですね。作品の大きさや、威厳があるといった外側から感じる立派さではなく、作品の中からクレーが考えていたある種の企みや意図に触れることで、クレーを知ることができそうです。クレーの考えを探って共感することがクレーの作品の楽しみ方なのだと思います。

島本さん、
ありがとうございました！





特別編

今回のテーマ

「みてコレ」を活用する

2026年春、小・中学生の作品を多数掲載した開隆堂の作品ギャラリー「みてコレ」がオープンしました！

小・中学生の作品をいつでも誰でも鑑賞することができる Web サイトです。

今回、「みてコレ」開設特集として、三つのポイントと、「みてコレ」の ICT 活用例をご紹介します。

ぜひ「みてコレ」にアクセスして、図画工作や美術の授業に役立ててくださいね。

今すぐ
「みてコレ」を
チェック！

新しい作品を
毎月更新中！

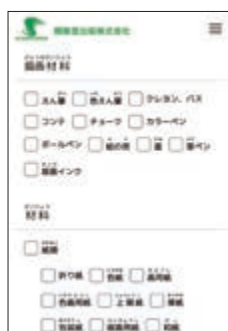


<https://plus.kairyudo.co.jp/>

POINT

1 さがしてみて！

作品は教科書の題材や領域だけでなく、検索したい条件を自由に組み合わせて検索することができます。「手元にある材料でどんな作品ができるのかな。」とヒントを探したり、自分の作品と見比べながら鑑賞したりして、新しいアイデアや発見の糸口にしてみてください。



トップページから「小学生の作品」または「中学生の作品」→「条件を指定して検索」をクリックすると表示される。検索したい条件の□にチェックマークをつけて検索する。キーワードを追加することもできる。

POINT

3 やってみて！

作品のタイトルに【360°】とついていたら、必見！**360°**とついていてる作品は、正面以外からも鑑賞することができます。多面的に作品を見ながら、作品の細かなつくり注目してみてください。次の授業で取り入れたい技法や手法のアイデアが見つかるかもしれません。

POINT

2 つくってみて！

すべての作品に、「作者の言葉」を掲載しています。どんな思いでつくったのかを知ること、作品の見方が広がります。さまざまな作品を鑑賞することは、新たな発想にもつながります。お気に入りの作品を見つけて、次の作品づくりの参考にするのもよいですね。



学年を問わず作品鑑賞を楽しめるように、作者の言葉を含めたすべての漢字にふりがなをつけている。



作品の詳細画面の右下に表示されるボタンのうち、**360°**をクリックすると自動で、**◀ ▶**をクリックすると手で動かすことができる。

ICT活用アイデア

開隆堂出版「図画工作5・6下」に「見て感じてわたしの表現に」という題材があります。芸術家の作品を鑑賞し、気に入った表現方法を自分の絵に取り入れて表す題材です。今回、この題材のまとめに「みてコレ」を活用し、「他の学校の子供たちはどんなふうに表示しているのだろう。」と鑑賞する時間を設けました。



「みてコレ」にアクセスした子ども達は、掲載されている作品を鑑賞しながら、「こういう表現も面白いね！」と製作した作品との表現の違いや特徴を主体的に話し合い、鑑賞を深めていました。教科書にも魅力的な作品が多数掲載されていますが、「みてコレ」はそれ以上に豊富な作品があり、さらに自分達が住んでいる地域以外の子ども達の作品も鑑賞することができるため、子ども達にとって大きな刺激になったようです。

ICT活用は、鑑賞の場面で特に効果を発揮すると考えています。学習指導要領の目標にも、中学年は「身近にある作品」、高学年は「親しみのある作品」と明記されており、

「みてコレ」の作品もこれらに合致します。「他の地域の子供たちは自分たちが取り組んだ題材で、どのような表現をしているのだろうか。」という視点で、授業に活用してみたいかがでしょうか。



東京都江東区立有明小学校
主任教諭
ながよし まりこ
長葭真利子

日常を見つめて

— アートの視点で —



表現したいものを、感性を働かせて描いた児童の作品

あの子が選ぶ カーテンの色は？



愛媛県松山市立
清水小学校
校長
おおくらたけひと
大倉匡仁

図工・美術教育は、人間教育である。これは、ある先輩教師の口癖で、私がずっと心に留め、大切にしてきた言葉でもある。いかに「心」を育てるか。昭和、平成、そして令和へと時代が移り変わっても、豊かな情操を養うという、日本の図工・美術教育における目標は一貫している。

私は、充実した活動の結果として作品が生まれると信じ、小学校や中学校で授業実践を重ねてきた。目指すのは、子ども自身が心から「表現したい」と思うこと。そしてそれをいかに子ども自らに追求さ

せるかということである。私にとって教材研究とはまさにそのための準備であった。授業における40人40通りの（今は35人だが）目標と授業展開を思い浮かべ、個々の活動が停滞したときに働きかけるための補助材料や提案内容などを用意する。一方で、そのようにして臨んだ授業の中で、子ども達から教えられたことは、数限りなくある。人物クロッキーは人の苦手だという子が別の題材で見せた、現代子らしいすばらしい色彩感覚に驚かされたこと。思い入れが強くなりすぎて「私には描けない。」と悩み続けた子が完成させた、思春期の瑞々しい感性がほとばしる14歳の自画像に脱帽したこと。子ども達が拙い私の指導で、豊かな情操を養うことができていたなら本望である。

「先生。俺、絵を描くのは嫌いだけど、美術の時間はちょっとだけ楽しかった。」そう言って卒業していったあの子が、その「ちょっとだけ楽しかった」美術の時間に身につけた感性で、将来、自分のつくる家族と一緒に、どんな色のカーテンを選ぶだろうか。そのように考えたことがあったのを、今頃になってふっと思い出した。

見方が変わる



群馬県みなかみ町立
みなかみ中学校
教諭
なぐもゆうと
南雲優人

「親子の温かい絵だと思いました。」山口薫の「花子誕生」を初めて見た生徒の多くは、そのような印象を抱いていた。しかし、授業が進むにつれて、「牛は鎖につながれている」「表情が悲しそう。」「背景の赤は、温かさだけでなくどこか不安感じがする。」など、生徒達の目は作品の細部へと向き始めた。そして、教師や友達との対話を通して、「この絵は戦後の時代を表しているのではないか。」「親牛は作者自身で、子牛は未来への願いを表しているのかもしれない。」などと、作品の意味を自分なりに考えるようになった。

私は、この「見方が変わる瞬間」こそ、美術の授業の醍醐味だと感じている。鑑賞には正解がない。だからこそ、一人では気づけなかった視点に、対話を通して出会うことができる。「そんな見方があるんだ。」「言われてみると、そう見えてきた。」そのようなやり取りの中で、生徒は自分の考えを大切にしながらも、新しい見方を自分の中に取り入れていく。

美術の授業は、作品について学ぶ時間であると同時に、他者との対話を通



他者との対話を通して新しい気づきを得ている

して自分の見方を更新していく時間でもある。時間がたっても作品そのものは変わらない。しかし、その作品を見る人の見方は刻々と変わる。そして、その変化を生み出すのは、教師や友達との対話である。

作品を見る目が変われば、きっと日常を見る目も変わっていく。何気ない風景や出来事にも、新しい意味や価値を見出せるようになる。そのような「見方」を育てることこそ、美術教育の大切な役割なのではないだろうか。

学年 第2学年

時間数 4時間

光を通したスライムの美しさや色の重なりに気づく

光の国 ゆめの色

●令和6年度版 開隆堂出版「図画工作1・2下」20・21 ページ
「ならべて 見つけて いろいろ色水」をアレンジ

福岡県行橋市立
泉小学校 教頭
すぎした だいすけ
杉下 大輔



※本実践は前任校(福岡教育大学附属小倉小学校)に在籍時に実践したものです。



題材のねらい

光を通すスライムの形や色、感触、見え方の面白さに気づきながら、試したり遊んだりする活動を通して、自分なりの光と色との関わりを深める。

主な材料・用具

色つきの透明スライム
(教師が洗濯のり、ホウ砂水、食紅でつくっておく)
クリアファイル 透明板
LEDライト 型抜き用具
ストロー タブレット端末など

学習の流れと 子どもの活動

- ① スライムの感触や特徴を味わう中で、光を通すという性質に気づく。
- ② 光に透かしたり窓に貼ったりして、スライムの見え方を楽しむ。
- ③ 友達と互いの活動についてよさや違いを伝え合い、自分の活動に生かす。



ライトにあてたスライムの様子を記録する子ども

本題材は、「色水遊び」で経験した、光を通した色水の美しさや色の重なりへの気づきを発展させるため、光を通し、水と異なる活動が可能なスライムを材料として用いた造形遊びです。材料との出会いから生まれる発見や驚きをもとに、子ども達が自分なりの表し方を見つけていくことを大切にしました。

■材料との対話を通して

導入では、どのように活動するかはあえて示さず、まずはスライムそのものと出会う時間を設

定しました。子ども達は、スライムを触ったり伸ばしたりしながら、「ぶるぶるして気持ちいい。」「光が通るよ。」「重ねると色が変わった。」など、材料のもつ特徴に気づいていきました。さらに、ストローで息を吹き込んで膨らませたり、いくつも重ねたり、ちぎったりつなげたりするなど、一人一人が思い思いに試しながら遊び方を広げていきます。教師は、表現する活動へと急かすのではなく、材料との対話を通して生まれる気づきや試行を十分に保障

することを心がけました。

また、窓ガラスや透明板、ライトなど、光と関わることできる環境を意図的に準備しました。すると、子ども達はスライムを光に透かしたり、窓に貼ったりしながら、形や色、光による見え方の変化を楽しみ始めました。光と出会うことで、それまで気づかなかったスライムの色の重なりや透明感の美しさを発見し、自分の表し方をさらに更新していく姿が見られました。

■友達との対話を通して

活動の途中で、友達と互いの活動を見せ合う場を設けました。「どうやって膨らませたの。」「その色きれいだね。」といった自然な対話を通して、さらに新たな発想が生まれ、自分の活動を見直したり広げたりする姿が見られました。一人一人の気づきや工夫が互いに影響し合いながら、教室全体が「光の国」へと変化していったのです。

■さまざまな気づきから発想を深める

本実践では、教師が活動を示すのではなく、子ども自身で材料や光と出会い、友達と対話する中で、自分なりの遊び方や表し方を見つけていくことを大切に

しました。スライムとの出会いから生まれた小さな気づきが、試行や対話によって新たな発想へとつながり、活動が更新されていく。その過程こそが学びを楽しみました。

む姿であり、子どもが材料や友達と関わる中で自分なりに表現する姿に、図画工作科の豊かな学びを見ることができたと感じました。

題材の観点別評価規準

題材の観点別評価規準			
主	思	知	
スライムを混ぜたり光を通す環境に並べたりすることに関心をもち、友達と関わりながらスライムで思いついたことを表す学習活動に楽しく取り組もうとしている。	鑑賞	技能	知識
	自分や友達の活動の面白さ、表し方の工夫などについて感じ取ったり考えたりして、自分の見方や感じ方を広げている。	発想 構想	違う色のスライムを混ぜていろいろな色のスライムをつくったり、光を通す環境に並べたりするなど、工夫して活動している。
スライムの色や光による見え方の違いをもとに造形的な活動を思いつき、どのように活動するか考えている。			

ふり返し

- スライムを重ねたら色が変わってびっくりしました。光に当てるともときれいになりました。
- 大きく膨らませたら風船みたいになって面白かったです。
- 友達のやり方を見てまねしたら、もときれいな形ができました。
- みんなの作品がつながって、本当に「光の国」みたいになりました。



学年 第2学年

時間数 14時間

自己を抽象彫刻で表現する

未来に向かって 成長する私

●令和7年度版 開隆堂出版「美術2・3」52～55 ページ
「イメージを形にして」をアレンジ

静岡県牧之原市立
榛原中学校 教諭
しのみや けんいち
四ノ宮 研一



遠近効果を用いて野外彫刻のように撮影した作品



「咲いて 晴れる」



「人の関わりと成長」



「一つの目標に向かって」



「My future」

題材のねらい

生徒が自分自身と向き合い、未来への夢や願いを、抽象彫刻で表現する。造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしい発想と表現の実現を目指す。

主な材料・用具

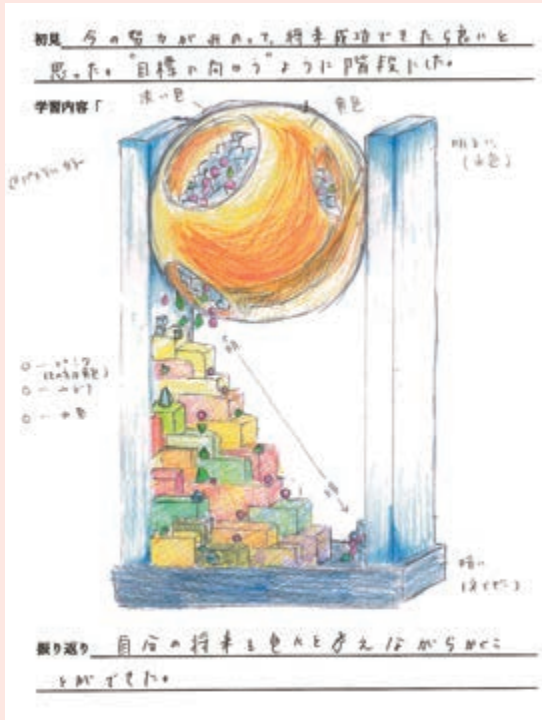
超軽量紙粘土
描画（水彩絵の具、アクリルガッシュ、材料（ポスターカラー）
木工用接着剤 針金 ペンチ
デジタルカメラ など

学習の流れと 子どもの活動

- 1 バブリック・アートの鑑賞（参考：岡本太郎、カート・パーシキー、ジュン・T・ライ）
- 2 アイデアスケッチ…過去あるいは現在から未来に向けて、下から順番に構成する。
- 3 粘土制作…パーツをつくって組み立てる。
- 4 遠近効果を用いた写真撮影（校内または校外）
- 5 鑑賞会…抽象彫刻作品と撮影した写真について語り合う。

■抽象彫刻作品との出会い

まずパブリック・アートの理解を深めるため、作家作品の鑑賞を行いました。抽象彫刻作品を意図的に取り上げ、形や色彩の印象から作品に込められた思いやストーリー性を感じ取ることで、単純な形や色彩の組み合わせから多様な表現が生み出される面白さを共有しました。次に、単純な形が与える印象について考える時間を設けました。丸は「やさしい」「楽しい」「成功」、三角は「つらさ」「苦勞」「失敗」、四角は真面目」「地道」「安定」など、生徒それぞれが自分なりのイメージをもつ機会となりました。一人一人造形的な見方・考え方に違いは出ますが、重要なのは作品からストーリーを感じ



アイデアスケッチ

じ取り、自分の考えを形成してそれを言語化できるようになることです。鑑賞と表現を相互に関連づけることで見方や感じ方が広がっていくことを、授業を通して実感できました。

本題材は、単純な形の組み合わせで構成することで、デッサン力や造形的な技術にとらわれず、のびのびと表現できるようにしました。アイデアスケッチをじっくり行い、自分の気持ちに合った形や配色を明確にしてから制作を進めていきます。

■全ての生徒の思いを聞く時間

制作中に、表現に対する思いを聞き取る個人面談の場を複数回設けました。その際に、作品づくりの悩みを聞いたり、さらに発展さ

せたい表現についてアドバイスをしたりしました。

■材料の工夫

短時間で何度も試行錯誤できるように、ミニチュア彫刻作品を制作することとしました。材料には触り心地のよい伸縮性のある紙粘土を使用し、水彩絵の具を練り込んだり、成形後にアクリルガッシュで着色したりして自由に工夫して表現できるようにしています。紙粘土のような可塑性のある材料は、何度も伸ばしたり練ったりできるため、失敗を恐れずにごくまでも表現を追求することができます。生徒の興味・関心を継続させるための、親しみやすい材料選定を心がけました。

■鑑賞の工夫～作品の撮影～

完成した作品がパブリック・アートとして街に設置された様子を疑似体験するため、校内で遠近法を用いた撮影を行いました。生徒同士でペアを組み、作品を近景に、作者を遠景に配置することで、まるで作者が作品を鑑賞しているかのような構図になるよう工夫させました。作品が撮影を通して存在感を増した様子に、生徒達は驚きと喜びを感じていました。制作中とは異なる視点で作品の価値を再発見し、新たな発想を育むきっかけとなりました。

題材の観点別評価規準

主		思		知	
鑑賞	表現	鑑賞	発想・構想	技能	知識
作者の意図や工夫などについて考え、造形的なよさや美しさを、形や色彩がもたらす印象から感じ取り、見方や感じ方を深める鑑賞活動に主体的に取り組むとしている。	美術の創造的活動の喜びを味わい、抽象表現への関心を持ち、形の追求及び伝え合う活動において、主体的に取り組もうとしている。	作者の心情や主題に沿った工夫などについて、造形的なよさや美しさを感じ取りながら自分なりの見方・感じ方を深めている。	題材をもとに自らの主題を生み出し、形や色彩の効果を抽象表現に生かしながら、創造的に構想を練っている。	材料の特徴を理解し、各部分で表現したいことに応じて工夫しながら形を追求して表している。	形や色彩などが感情にもたらす効果や、地域とつながるというパブリック・アートの特徴をもとに、抽象彫刻を全体のイメージや作風でとらえることを理解している。

ふり返り

- 二つの形に意味をもたせ、未来を考えながら組み立て、形ができていく楽しさを学びました。
- 学校で遠近法を使って撮影してみたら、自分の作品がより迫力を増したことに驚きました。もし地域とつながって実際に自分の作品が好きな場所に設置されたら嬉しいだろうなと思いました。



金属でできた 風と自然

木にアルミホイルを巻きつけて金属をメインにしました。
他にも空き缶を斜めに切って風のようにしました。



金属でできた風と自然 [アルミホイル、木材、針金、空き缶、枝／高さ25cm]

さかえ い お り
6年 榮 伊央利

先生のめ

本作品は、メタリックな魅力で小学6年生を惹きつける「金属と木でチャレンジ」という題材の作品です。本題材では、金属を加工することを通して発想を広げ、金属ならではの材質感を生かしながら表現したいものをつくりまわす。

榮さんはこの作品で、目でとらえにくい「風」を無機質な金属で表現することに挑戦しました。友達と一緒に楽しく活動しながら、さまざまな材料で加工方法を試した榮さんは、木にアルミホイルを巻きつけることで風の動きを表現しました。また、空き缶を風車のような形に加工し、一つずつ形に違いをつけることで多様な風の種類を表現したそうです。

金属と風という、一見結びつきそうにないものを作品の中で見事に融合させた榮さん。固定観念に縛られず、新しいことに挑戦して新たな価値をつくりだすことを楽しんでるその姿に、教師として深い感銘を受けました。子ども達が柔軟な発想や多様な視点を共有するための環境を整えることは、新たな価値観との出会いや変化を促すきっかけを与えるための、とても大切な教師の役割であると改めて感じています。

かみさこ てつ や
(文) 埼玉県戸田市立笹目東小学校 教諭 上廻 哲也

子ども達の「やってみたい」が集まる場所

さがしてみ
てつくってみ
てやってみ

みてコレ



造形
JOURNAL

No.450 / 2026

2026年9月30日発行

非売品

発行所 開隆堂出版株式会社
〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
電話:03-5684-6121(営業)
03-5684-6118(販売)
03-5684-6117(編集)
編集兼発行人 井口廣之
印刷所 株式会社大熊整美堂
本文・表紙デザイン
有限会社アーバングラフィックス



開隆堂出版株式会社

<https://www.kairiyudo.co.jp>

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
北海道支社 〒060-0042 札幌市中央区大通西11丁目4番地21 52山京ビル7階
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階
名古屋支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目15番18号 オフィスサンナゴヤ9階
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2丁目1番5号 FYCビル3階

TEL:03-5684-6111
TEL:011-231-0403
TEL:022-742-1213
TEL:052-908-5190
TEL:06-6531-5782
TEL:092-733-0174